

モーツァルトをめぐるフリーメーソンの状況

福原 淳

1

W・A・モーツァルト（一七五六一一七九一）がフリーメーソン結社に正式に加盟したのは、彼が二十八歳の終り頃、一七八四年十二月十四日のことであった。

彼はウィーンの「善行」（Zur Wohltätigkeit）というロッジ（支部）に加入を願い出て、その最初級である「徒弟」の第二十番として認可された。紹介の労をとったのは、マンハイム以来のモーツァルトの知人で、この支部の創立者兼大親方オットー・フォン・ゲミンゲン男爵であった。そして翌一七八五年一月七日には第二級たる「職人」に進級し、更に四月二十二日には第三級の「親方」に昇進している。

この昇進ぶりは、当時としては必ずしも例外的な速さではなかったにしろ、加入後の彼の真摯なメーソンとしての姿がうかがえよう。

モーツァルトは更に、ロッジの会合に自ら出席するだけでは満足せず、父親レオポルト（一七一九一—一七八七）や先輩のハイドン（一七三一—一八〇九）まで勧誘し、入会させたのであった。

ハイドンは当時、ハンガリーの貴族エステルハーシ侯の楽長として、アイゼンシュタットを中心に活躍していたが、彼の入会式はモーツァルトのそれより約二か月後の一七八五年二月十一日に、ウィーンの「真の和合」（Zur wahren Eintracht）ロッジで行なわれた。

ハイドンはその翌日、モーツァルト家に招かれて、彼に献呈された弦楽四重奏曲（いわゆるハイドン・セット）のうちから三曲（変ロ長調K四五八、イ長調K四六四、ハ長調K四六五「不協和音」）を聴いたが、前日ザルツブルクからウィーンに出てきて、この場に居合わせた父レオポルトは、この時の模様を、娘のナンナールに宛てた二月十六日付の手紙で、次のように記している。

「土曜の夕方、ヨーゼフ・ハイドン氏と二人のティンデイ男爵が家に見え、新しい四重奏曲が演奏された。演奏したのは新作の三曲だけで、そのほかにもう三曲ある。それらは幾分軽い調子のもだったが、なかなかよく書けていた。ハイドン氏は私にこう言ってくれた。『私は正直な人間として神に誓って申しあげるが、私の直接間接に知る限り、あなたの御子息は最も偉大な作曲家です。美についての良い趣味をお持ちだし、その上優れた作曲技術を身につけておられる。』と。」⁽¹⁾

有名な手紙の一節であるが、この日がハイドンのロッジ入団の翌日であり、またティンデイ兄弟が「真の和合」ロッジ所属のフリーメーソンだったにも拘らず、レオポルトがそうした点に一言も触れていないのは、かえって興味深い。

なおハイドンは加入以後、勤務上の理由もあってか、ロッジの会合には全然出席しなかったようである。

一方、ウィーン滞在中の父レオポルトは、息子より三か月後の一七八五年三月二十八日に、息子と同じ「善行」ロッジに入団の推挙を受け、四月六日に入会式に参加、十日後の四月十六日には第二級に、そして数日後の四月二十二日には早くも第三級の「親方」に昇進している。

このスピードぶりは、レオポルトがザルツブルクへの帰還を急がねばならず、手続きなど特別の免除があったためとも言われる。四月二十二日の昇進式は、「真の和合」ロッジにおいて、同支部の大親方イグナツ・フォン・ボルンの主催で行なわれモーツァルト父子はそろって出席した。そしてその三日後には、二人が再び会えずに終ることになるとも知らず、レオポルトはウィーンを去って行く。

以上述べたことでもわかるように、モーツァルトはフリーメーソンというものに対して非常に熱心な態度を示し、会合にも度々出席したことが記録に残っているが、それと共にまた、結社のために、珠玉のような作品をいくつか書き残しているのである。これらの個々については後述するとして、モーツァルトの心をこれ程まで深く捉えたフリーメーソンとは一体何であつたのだらうか。

フリーメーソン (Freemason) とは本来、英語で「自由な石工」を意味し、中世の石工組合に由来を持つ。城館や聖堂が石造建築であった当時のヨーロッパでは、その工事に際して石工達に依存する所が大きく、彼等は建築家そのものを意味し、その特殊技術は「王者の技術」と言われた。石工は職人の中でも特に重要なものとされ、特別の庇護を受け、様々な義務を免除されるなど、多くの自由を得ていた。中世の職人達が普通、地域のギルドに所属し、その強い拘束を受けたのに対し、彼等だけは現場から現場へと自由に渡り歩く職人であり、旅によって見聞を広めることも出来た。しかし一旦大きな建築工事が開始されれば、そこに集められた石工達は、長い年月にわたってその工事現場で生活しなければならなかった。彼等はそこに仮設の小屋を建て、集団で寝泊りすることになり、この小屋は英語でロッジ (Lodge) と呼ばれた。所でこうした集団生活を維持して行く上で、当然何らかの自治的な組織と規約が必要となる。彼等は所与の特権の維持と相互扶助の目的で組合、ギルドを結成すると共に、厳しい掟を設けて自分達の生活を律し、徳性の涵養に努めた。当初は「職人」(fellow craft; Geselle) という階級しかなかったが、やがてその上下に「親方」(master mason; Meister) と「徒弟」(apprentice; Lehrling) が付け加えられ、組合員相互は「兄弟」と呼び合って友愛を深めた。石工達は当然の事として、彼等の技能上の知識や、建築上の秘密を他に漏洩することを禁じられ、そのため仲間うちにししか通用しない符丁や合言葉を用いた。またギルドへの加入の際には、特別の秘儀や試験を伴う入会式 (Initiation) が行なわれ、それによって初めて正式のメンバーとして承認されるのであった。こうして彼等のギルドは密教的な色彩を帯びるものとなったのである。なお現存する彼等の最古の憲章は一三九〇年のものといわれる。

所で時代が降って、ルネッサンスを経たヨーロッパが近世にはいる頃になると、ヒューマニズムの興隆や科学の発達が次第に中世的な封建領主や教会の権威を弱めていき、こうした社会的変動に伴って、石工達の組織も、変貌を遂げざるを得なくなる。つまり、石造大建築の請負い仕事が著しく減ってきたのであり、当然それはまた組合員の減少を来し、メーソン組織の存亡に関わる問題となった。ここに至って、本来進取的であったメーソンは、いわゆる石工以外の人達にも門戸を開き、メンバーとして迎えることになったのである。こうして新たに迎えられた会員は「容認されたメーソン」(accepted mason) と呼ば

れたが、職人風で異教的なムードがかえって上流社会の人々の心を引き付けたのか、彼等の間に一種の流行を産み、現場の仮設小屋であったロッジに貴族の連中までが出入りし、石工達に混って彼等の憲章を唱え、彼等の精神修養に加わったのである。しかしそれと共にフリーメーソン組織は本来のギルドとしての性格が薄れて、次第に精神的な意味を強めていき、そして十八世紀にはいる頃には、驚いたことに、こうしたメーソンのロッジから本物の石工達が姿を消してしまつて、専ら進歩的な人士の修練の場と化してしまふ。本来のいわゆる行動的 (operative) フリーメーソンから近代的な思弁的 (speculative) フリーメーソンへの変身である。

3

こうした近代的な意味でのフリーメーソンは、一七一七年にイギリスにおいて正式な誕生をみる。彼等は同年七月二十四日にロンドンに大支部 (Grand Lodge) を設立し、フリーメーソン組織の再編成を行なつた。そして六年後の一七二三年には新しいフリーメーソン憲章が、プロテスタントの牧師ジェイムズ・アンダーソンによつて起草され、公表される。そこにおいて、フリーメーソン結社の「世界市民主義的、自由主義的友愛組織」としての性格がいちはやく打ち出され、国際的な一大運動として、イギリスはもとより、フランスやドイツ、オーストリア等ヨーロッパ各地へと急速に広まり、更には新大陸にまで波及して行つたのである。

フリーメーソンはヒューマニズムとコスモポリタニズムを信条とし、その中心的理念は自由・平等・博愛であつた。こうした会の原理に忠実である限り、原則的には民族や国家、社会的地位、宗教の別等によつて会員の資格が制限されることはなかつた。個人の人格を高め、徳を磨き、知を修め、善行を他に施すことを旨とした。宗教的には寛容であり、宗派の別を超越して、「万人の一致して認める宗教」の信奉者たらんとした。

彼等は中世以来の石工のギルドを歴史的母体としたため、基本的にはその諸制度をそのまま採り入れて、彼等の結社を作つた。彼等は自分達をフリーメーソンと呼び、その支部や集会所をロッジと呼び、会員の階級も、徒弟、職人、親方と職人用語で呼んだ。もっとも、新しいメーソン組織では多くの新しい位階が加えられて、三十三位階などとも言われるが、前の三つが

基本的位階であることに変わりなく、他は滅多に授与されることのないものであった。会員は普通の場合、男子のみであり、互いに兄弟（盟友）と呼び、ロッシは平等主義の原理に基いて運営された。修学、修徳のための戒律を作り、会員はそれを厳守すると共に、彼等の内部での言動については、これを外部に漏らすことを禁じられた。そして中世のメーンソン同様、特殊な符丁を使い、神秘的な象徴や暗号が好まれた。

このように組織の形態において、中世のそれがかなり受け継がれたが、しかし近代においては、思弁的メーンソンとしての精神化が進んだ結果、その儀式的要素は著しく複雑化したのであった。彼等は中世の石工組合の伝承をはるか遠く、エジプトその他古代東方の神話や密儀にまで遡らせ、また中世以降の様々な神秘思想の流れを汲み入れて、儀式における神秘的象徴性を深化させた。また建築という事自体が観念化されて、槌やのみ、定規やコンパスなどが、結社の社旗や徽章として象徴化された。彼等にとって「人間の殿堂の建設」が理想として掲げられる。彼等は「宇宙の創造者たる建築家」としての神を崇拜する。そしてこの建築家は太陽に象徴される。万物の根源、光の源泉たる太陽が彼等の神なのである。これは明らかに古代エジプトの太陽神崇拜を思い起こさせよう。

しかしこうした古くからの面が多く引き継がれ、発展させられたにも拘らず、一方またフリーメーソンは、そのコスモポリタニズムや人道主義、理神論的な信仰、個人主義的倫理、人類の進歩に対する信念等の点で、当時台頭しつつあったブルジョアジーのイデオロギーたる啓蒙主義と密接に結びつき、その担い手ともなったのであった。

当時の人々はもはや既成宗教のドグマに束縛されることなく、人間の理性によって新秩序を建設し、人類の進歩、向上を図ろうとする革新の気運に燃えていた。フリーメーソンの堅持する啓蒙主義的理念は当然、当時の中産階級や、特に進歩的な知識人達の共鳴を呼び、多くの支持をかち得た。各国の王候をはじめ、政治、学問、芸術等、各界の名士で、この結社の活動に関わりを持った者も少なくない。若干の著名な例を挙げれば、イギリスではジョージ四世、ネルソン提督、ポープ、スウィフト、フランスではダントン、ボーマルシェ、それにヴォルテール、ダランベールなど百科全書派の多数、アメリカではジョージ・ワシントン、ベンジャミン・フランクリン、そして独逸ではプロシア国王フリードリッヒ二世、オーストリア皇帝ヨーゼフ二世、ワイマル公カール・アウグスト、それにゲーテ、レッツィング、ヴィーラント、ヘルダー、フィヒテ等である。

しかしまたそうした流行の反面、フリーメーソンの持つ諸特徴から推して当然予想されるように、この結社は何かうさんく

さい団体と考えられて、いたずらな誤解を産むことにもなった。本来はいわゆる秘密結社ではなかったにも拘らず、何かいかがわしい宗教団体乃至は政治的陰謀結社として、ローマ教会や政府当局から危険視され、迫害や弾圧の対象となったのである。一七三八年の教皇クレメンス十二世によるフリーメイソン禁止令に始まる迫害は、多くのカトリック諸国において強烈を極め、またあらゆる社会的、政治的陰謀がフリーメイソンに帰せられる傾向を産んだのであった。

所で、フリーメイソン結社は一つではなく、いくつかの種類が並存しているとも言われるように、その組織は順応性に富んでいて、主導権が各国に任ざられていたから、その運動の在り方や発展の仕方は、国情の相違に応じて異なった様相を示した。例えば、或る分派は純粹に宗教的な立場を堅持したのに対し、他は反教権的な立場を明確にしたし、また独塊のフリーメイソン結社では道徳的性格が特に強く、英仏ではそれに加えて社交的性格が著しかったなど。

次に独塊におけるフリーメイソンの状況を概観してみよう。

4

ドイツにフリーメイソン運動が導入されたのは一七三〇年代で、一七三七年には自由都市ハンブルクにグランドロッジが設立されて、大きな影響力を持った。一方、オーストリアでは一七四二年にグランド・ロッジが設立されるに至ったが、初期の熱心なフリーメイソンの一人は、マリア・テレジアの夫フランツ一世（在位一七四五―六五）で、一七三一年には早くもデンハーグでフリーメイソンに加盟している。一七三八年にローマ教皇クレメンス十二世がカトリック教徒のフリーメイソンへの加入を禁止する勅令を出した時も、オーストリアではカトリック教徒の教会への服従とフリーメイソン結社への加入とが相容れないものとはされず、禁令は遵守されなかった。そして高位の聖職者達でさえ、ロッジに出入りする程であった。しかしフリーメイソンに批判的であったマリア・テレジア（在位一七四〇―八〇）は、夫の死と前後して、フリーメイソン禁止令を出し、結社員の迫害に乗り出した。彼女の息子のヨーゼフ二世（在位一七六五―九〇）は進歩的な啓蒙専制君主として知られ、フリーメイソン思想にも共鳴していたので、その弾圧には反対し続け、母親が一七八〇年に死ぬと、禁止令を撤廃し、その存在を合法化するという寛容政策をとった。モーツァルトがフリーメイソンに加盟したのは、まさにこうしたオーストリアのメ

ローン結社の黄金期であり、ウィーンには八つのロッジがあつて、各界の錚々たる名士達が名を連ねていた。所が一七八五年の末になると、ヨーゼフ二世は勅令を發して、結社の規制に乗り出し、ロッジの合併縮小を図った。その理由は、当時多くの疑わしい結社が跋扈していたので、健全な結社を保護すると共に、結社をすっかりと掌握して、自己の支配下に置くためだったと言われる。このため多くのロッジが閉鎖され、別のロッジに再統合された。この改組が結果的には結社を破局へと導いたことは確かで、わずかの間にウィーンのメーンソンの公認数は大幅に減ったという。このヨーゼフ二世が一七九〇年に没すると、後を継いだ弟のレオポルト二世（在位一七九〇—二）は反動政策を強め、フリーメーンソンに対しても、これを非公認の団体としてしまう。彼の妹マリー・アントワネットの運命をも巻き込んだ、例のフランス革命（一七八九年）の原因が、国際的なフリーメーンソン結社乃至は啓明団（後述）の陰謀にあつたとする風評が広まつたことにもよる。次の後継者フランツ二世（在位一七九二—一八三五）は、はっきりとフリーメーンソンに対する弾圧を強め、その結果、フリーメーンソン運動はすっかり下火になってしまふ。勿論この頃にはモーツァルトはすでに此の世を去つてしまつていた。

所で、十八世紀の中頃、ドイツのフリーメーンソン結社は、活動の目標や儀式のやり方の相違によつて、いくつかの異なるセクトに分かれており、相互に共通する特徴もあつたとはいへ、しばしば激しい対立を見せた。そうした状況のとりわけ重要な背景となつた存在が、「バラ十字団」(Rosenkreuzer)と「啓明団」(Illuminaten)であつたと言われる。

一七五六年頃ドイツで設立されたバラ十字団は、初めはフリーメーンソン結社の外にあり、専ら錬金術や神智学などに関心を向けていたのだが、やがて何らかの形で両者が離れたい程混淆して一体化し、中でもそれが一七七五年に結成されたウィーンで顕著であつたと云う。バラ十字団は啓明団と激しく対立し、後者の反教権主義や政治関与の姿勢を非難した。

啓明団も当初はフリーメーンソン運動と無関係で、一七七六年にバイエルンのインゴルシュタット大学の教授アダム・ヴァイスハウプトによつて設立された。彼はイエズス会の出だが、その哲学に激しく反発し、ルソーやデイドロの思想を基に、理性と人間性の敵に対抗する同盟として、啓明団を組織した。彼は組織の充実のために、フリーメーンソンの中からも支持者を募り始めた。やがてハノーヴァー出身の作家で、ルソーの弟子でもつたアドルフ・フォン・クニッゲ男爵の協力を得て、啓明団は南ドイツやオーストリア等多くの地域でフリーメーンソンのロッジに浸透し、それを支配するようになった。しかし一方、教会や政府当局は、この運動の急速な発展に危惧の念を抱くようになり、まずバイエルンのイエズス会が啓明団を非難する運

動を開始、啓明団のライヴァルのバラ十字団もこれに同調した。イエズス会から影響を受け、またその聴罪司祭がバラ十字団員であったバイエルン選帝侯カール・テオドールは、一七八四年、啓明団その他の秘密結社がバイエルンで活動することを禁ずる勅令を出した。特に啓明団への迫害がひどく、ヴァイスハウプトはインゴルシュタットから追放され、多くの人が逮捕され、罰せられた。

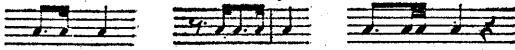
啓明団は、その全盛時には多くの団員を擁し、ワイマル公カール・アウグスト、ゴータ公エルンストや、ヘルダー、ペスタロッチ、ゲーテ等が含まれていた。ウィーンでは、メーソン支部「真の和合」の大親方イグナツ・フォン・ボルン、同じく「善行」支部の大親方オットー・フォン・ゲミンゲンなどもこの団体のメンバーであった。この二つの支部は啓明団員がリーダーシップを握っていたため、多くのメーソンが啓明団員でもあった。またこの二つの支部は殿堂を共有しており、兄弟支部の儀式にもしばしば出席していたモーツァルトが、同様に啓明団の一員であった可能性も考えられる。しかし迫害の際に多くの記録が破棄されてしまい、またモーツァルト父子も、彼等が書き残したの中にはそうした事実に触れたものが見られないので、その証拠はない。

5

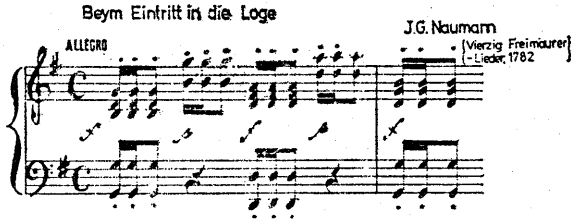
所で、フリーメーソン結社と音楽との関係であるが、ロツジは音楽家仲間から特別な支援を受け、とりわけ独逸では、多数の音楽家の姿がそこに見られたと言う。そもそも、フリーメーソンの会合や儀式では、当初から音楽が重要な役割を演じていた。キャサリン・トムソンは、一七四六年に刊行されたメーソンの歌謡集の序言の中でL・F・レンツの言葉を引用して、「儀式における音楽の役割は、会員達が無垢と至福の思想において団結するように、会員達の間健全な思想と団結心を広める所にある。音楽は人間愛の感情、知恵と辛抱、美德と廉潔、友人への忠誠心などを、また最終的には自由を理解する力を教え込むべきである。」と述べている。確かにこうした共同体においては、同じ心的状態を得ることによって、盟友相互の精神的な交わりを準備し、莊重な雰囲気の中で、聖なるものへと気分や感情を高揚させるために、音楽は大変効果的であったろう。それ故、各ロツジは音楽家を加入させるべく努め、音楽家達も積極的に入団を求めたのであった。こうしてモーツァルト

の周囲でも多くの音楽家がフリーメイソンのメンバーとなり、結社のために作品を産み、演奏に加わったのである。例えば、パウル・ウラニツキー（授冠の希望）、ヴァーレンティン・アーダムベルガー（同）、ゲオルク・ベンダ（アルテンベルクの分団）、フランツ・ツェーラー（三羽の鷲）、カルロス・ドルドネス（同）、レオポルト・コジエルフ（棕櫚の樹）、カール・レオ

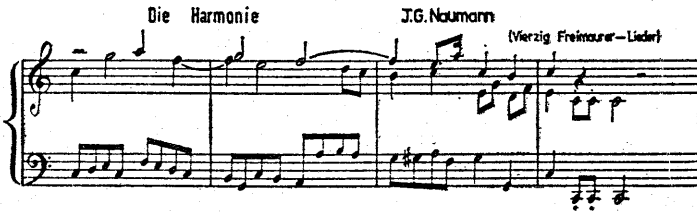
譜例 1



譜例 2



譜例 3



DIE KETTE



所で、パウル・ネットウルは、フリーメイソンのための音楽を、次の三種に分類している。第一は、ロッジの集会や宴会用に作曲された歌や器楽曲で、即ち機会的な、実用音楽である。第二は、もともとはメイソン結社用に書かれたものではないがその共通して人間的な、また荘厳な音楽的内包によって、結社用にご利用出来るような音楽である。第三は最高の種類で、機会的性格を持たず、純粹にフリーメイソンの信託告白の表現であるような音楽である。後で触れるように、モーツァルトにもこの三様のものが見られるであろう。

所でこのような結社用の音楽において試みられた手法として、トムソンは、民謡風の単純なスタイルの採用、音楽的象徴としての、一定のリズム型や旋律型の使用、特定の音程や和声進

行の利用、などを挙げてゐる。⁽⁴⁾ 確かにこうした機会に参加する人々は一般に音楽の素人が多く、しかも共同体意識発揚のために全員が唱和すべきものとすれば、当然その音楽は単純平明で、演奏も容易であることが望まれよう。またその歌のテキストが、共同体の理念を歌う、内部的な性格の強いものであつてみれば、ちょうどフリーメーソンの儀式において様々の象徴が用いられるように、種々の音楽的シンボルが用いられたことも肯ける。トムソンは、メーソン音楽のシンボリズムの若干の例として、次のようなものを挙げてゐる。⁽⁵⁾ 諸例1のような付点のリズムが、勇氣や決意を促すためにしばしば用いられる。また入会志願者が入会式の際に支部の戸を三回叩く仕草が、譜例2のような様式的な音型で表現される。対の掛留やスラー音が、同志の結束を示唆するために使われる(譜例3)。六の和音(三和音の第一転回)が共同の感情や調和的諸關係を示すために使われる。属和音—下中和音(V—VI)の進行、即ち偽終止が、或る種の祭儀的意義を担う。三という数字がフリーメーソンにおいて特殊な意義を備えているように、歌の多くが、三声体で書かれていたり、三拍子であつたり、また三回の繰返しがあれば見受けられ、長三和音が重要視される。等々。これはほんの数例に過ぎないが、こうした音楽的象徴については、今後なお一層の詳細な検討が必要とされるであらう。しかしいづれにせよ、トムソンも言うように、こうした諸特徴の全てが、モーツァルトのフリーメーソン作品にも同様に、しかもそれが一層拡大され、深化された形で、見出されるのである。

6

所で、既に述べたように、モーツァルトはウィーン時代の一七八四年末にフリーメーソンに正式に加盟したのであるが、モーツァルトと結社との關係は、すでにザルツブルク時代から様々な形で始まっていたと見るべきであらう。彼の生地ザルツブルクは、ローマ教皇から任命された大司教が統治する、カトリック的雰囲気濃い町ではあつたが、大司教の中にも当時の啓蒙思想に共鳴する者があり、聖職者でこうした結社に加わる者も少なくなかつた。ザルツブルクからほど近いミュンヒェンでは結社の運動が極めて盛んであつたし、ザルツブルクにも一七八三年には「思慮」(Zur Fürsicht)という折衷的結社が設立されている。モーツァルト父子がこのロツジに関わりを持ったかどうかは別として、それ以前から、彼等と親しい人達の多くがこうした運動に加わつており、彼等に何らかの刺激や影響を与えていたであらうことは十分考えられる。しかしただでさえモ

ーツアルトは、幼い時からの旅行によって多くの国々で見聞を広め、様々な考え方の人々に接していたであろうから、むしろ幼いうちからフリーメーソンや啓蒙思想の影響を受けながら育ったという方が自然であろう。またその事を示す証拠がいくつも見出せるのである。

モーツアルトは十一歳の時、旅先のオルミユツツで天然痘を患ったが、その時世話になったヴォルフという医師はフリーメーソンであった。翌一七六八年、十二歳のモーツアルトは、ジングシュピール「バスティアンとバスティエンヌ」(K五〇〥K⁶四六b)を作曲したが、この作品の依頼者は「動物催眠術」の提唱者メスマー博士で、彼もまたフリーメーソンであった。一七七二年、十六歳のモーツアルトは、メーソンのテキストによる歌曲「おお、聖なる絆」(後述)を作曲した。翌一七七三年、モーツアルト父子は三か月程ウィーンに滞在したが、その間しばしばメスマー博士を訪問し、彼を通じて多くのメーソンの仲間達に紹介された。その中の一人、進歩的な顧問官で有名な劇作家でもあったトビアス・フォン・ゲブラーが、彼の英雄劇「エジプト王タモス」のための付随音楽をモーツアルトに依頼し、モーツアルトは合唱歌と幕間音楽を書いた。この作品はフリーメーソンの色彩が濃く、「魔笛」とも主題が類似しており、その先行作品の一つと考えられている。なお彼は一七七九年にも、その音楽に改訂の手を加えている。モーツアルトは一七七七年の秋に母親を伴ってマンハイム・パリ旅行に出発したが、マンハイムでは、作家のフォン・ゲミンゲン男爵、国民劇場の監督グルベルク、詩人のヴィーラント等、多くの友人を作った。彼等は皆フリーメーソンで、後に「啓明団」のメンバーにもなった人達である。モーツアルトがマンハイムからパリに向かった時、懐中に入っていたのは、主にパリのメーソン達、特に「オリンピア・ロジ」のメーソン達に宛てた、フォン・ゲミンゲンの紹介状であった。「オリンピア・ロジ」の音楽会は、ル・グロの率いる「コンセル・スピリチュエル」のそれと密接な関係にあり、ル・グロは「スコッチ聖ヨハネ・ロジ」の一員であった。所でモーツアルトがパリで最も頼みとしたのは、少年時代の旅行の際、援助を借しなかったメルヒオール・フォン・グリム男爵であった。彼はパリにおける最初のフリーメーソン支部の創設者オルレアン公の秘書であった。この男爵の紹介者の一人で、モーツアルトの音楽の良き理解者となったフォン・ジッキンゲン伯爵もフリーメーソンであった。パリで母を失い、就職運動にも失敗したモーツアルトは一人帰途についたが、途中寄ったシュトラスブルクはフリーメーソン運動の一中心地であった。帰りがけに立寄ったマンハイムでは、ヴォルテールのエジプト風の戯曲を下敷にした、フォン・ゲミンゲン執筆のドゥオドラマ「セミラミス」のための音楽を作曲し

たが、これは失われてしまった。マンハイムで再会したモーツァルトの友人の大半はフリーメーソンであった。一七七九年、モーツァルトがパリから帰国後、ザルツブルクで書いたジングシュピール「ツァイーデ」は未完のままに残されたが、そこに表現されている思想は、フリーメーソンのそれに通じるものであった。なおモーツァルトのウィーン時代に、早くから彼の有力な助言者となったヴァン・スウィーテンやフォン・ゾンネンフェルスなどの貴族も、ウィーンのフリーメーソン結社で重要な地位にあった。等々。

以上の諸例からも明らかのように、モーツァルトのフリーメーソン加入は、決して突発的な出来事ではなかったのである。

7

モーツァルトはフリーメーソン結社に正式加盟以来、この結社のための作品を何曲か書き上げたが、それらは加盟の翌年一七八五年と、死の年一七九一年に集中して書かれている。なお、ネットウルによれば、一七八六年の作曲と思われる、結社のための二つの歌曲、「親方ロッシの開設に寄せて」(Zur Eröffnung der Meisterloge) と「親方仕事の完成に寄せて」(Zum Schluss der Meisterarbeit) があったが、これらは紛失してしまつたといふ⁽⁹⁾。それらを別にすれば、一七九一年迄、結社用の機会作品は一曲も書かれなかつたことになる。この数年の期間、モーツァルトは何らフリーメーソンのな作品を書かなかつたのであるうか。

例えば、モーツァルトのフリーメーソン作品を集めたレコードとして知られる、ペーター・マーク指揮の「フリーメーソンのための音楽全集」⁽⁷⁾には、普通にフリーメーソンのための曲と考えられているもののほかに、いくつかの器楽曲や、カトリック的な宗教音楽曲も収録されている。これらは直接にフリーメーソン結社の作品ではないが、結社でしばしば演奏されたものようである。例えば、一七八五年の末にウィーンで書かれたとされる、「二つのバセットホルンとファゴットのためのアダージョ、へ長調」(K四一〇 || K⁶四八四 d) や「二つのクラリネットと三つのバセットホルンのためのアダージョ、変ロ長調」(K四一一 || K⁶四八四 a) は、フリーメーソンの儀式に用いられたと推定されている。また一七八八年に作曲された、弦楽四重奏のための「アダージョとフーガ、ハ短調」(K五四六) や、一七九一年のフルート、オーボエ、ヴィオラ、チェロと

チェリストのための「アダージョとロンド、ハ短調・ハ長調」(K六一七)も同様である。更に、一七九一年に書かれた有名なモテット「アヴェ・ヴェルム・コルプス」(K六一八)は元来、教会用の作品であるが、フリーメーソンにも好まれたらしい。

またアルフレート・アインシュタインは、一七八八年の「交響曲第三十九番、変ホ長調」(K五四三)のフリーメーソンの性格を仄めかしている。⁽⁸⁾ トムソンはジャック・シャイエを引用しつつ、一七八五年初頭に作曲された「弦楽四重奏曲ハ長調、不協和音」(K四六五)のメーソンの意義を解いている。彼女は本著において、モーツァルトの多くの器楽作品にフリーメーソンのシンボリズムの痕跡を見出そうと努めている。その全ての妥当性には疑問の余地がないではないが、フリーメーソン加盟以後の作品の随所に、直接間接にフリーメーソンの精神の投影が見られることも否定出来ないのである。

更にまた、死ぬ二か月前の病床にある父親に宛ててモーツァルトが書いた、一七八七年四月四日付の有名な手紙があり、これも普通モーツァルトのフリーメーソンの信条を表わすものと解釈されている。

「——死は(厳密に考えて)われわれの一生の真の最終目標なのですから、私は数年この方、人間のこの真の最善の友とても親しくなつて、その姿が私にとつても何の恐ろしいものでもなくなり、むしろ多くの安らぎと慰めを与えるものとなっています。そして、神さまが私に、死がわれわれの真の幸福の鍵だと知る機会を(私の申すことがお分かりになりますね)幸いにも恵んで下さつたことを、ありがたいと思っています。——」⁽¹⁰⁾

重病の床に臥す人間に対して死を語るという一見不可解なこの手紙は、フリーメーソンとしてのモーツァルトが、もう一人のフリーメーソンとしてのレオポルトに宛てた手紙と解され、「死がわれわれの真の幸福の鍵だと知る機会」とは、フリーメーソン結社への関わりを暗示するものとされている。モーツァルトが語る安らかな死への想いはメーソンの説く所であり、モーツァルトがこの時点でなおフリーメーソンの信条を持ち続けていたことを示すものと言える。

以上のように、モーツァルトは、なるほどこの期間に結社のための直接的な機会作品を書かなかつたとは言え、加盟以来一貫してフリーメーソンの立場を保ち続けたと見るべきであろう。

次に、モーツァルトがフリーメーソン結社のために書いた個々の作品に目を通すことにしよう。

○歌曲「おお、聖なる絆」(O heiliges Band) K一四八(K⁶一二五h)

この作品は、他の多くのフリーメーソンの作品と同様に、モーツァルトの正式加盟後に書かれたものと考えられたこともあったが、今日では諸種の理由から、彼が十六歳の一七七二年頃にザルツブルクで書かれたものと推定されている。今は散逸してしまつた自筆楽譜の裏には「ヨハネ分団の儀式のための讃歌」(Lobgesang auf die feierliche Johannesloge)と書かれていたと云ふ。

歌詞はザクセン＝アルテンブルク大公宮中顧問官で、「三つの製図板のアルキメデス」ロジに属していたルートヴィヒ・レンツによるもので、十九節から成り、同じメロディで繰返して歌われる。

その第一節目は⁽¹¹⁾

O heiliges Band der Freundschaft treuer Brüder,
dem höchsten Glück und Edens Wonne gleich,
dem Glauben Freund,
doch nimmermehr zuwider der Welt,
bekannt und doch geheimnisreich,
ja, bekannt und doch geheimnisreich.

おお、信実な兄弟たちの友愛の聖なる絆よ、

それは至高なる幸福とエデンの喜びに比すべきものであり、

信仰の友であり、

しかもけつして世に背くものでもなく、

知られてありながら、しかも、神秘にみちたもの、

しかり、知られてありながら、しかも、神秘にみちたものである。

加盟以前の作品であるが、明らかにフリーメーソンの内容的な内容の歌曲であり、盟友の友愛を讃え、フリーメーソンの理想が歌われて行く。曲は通奏低音書法で書かれた、二部形式のわずか二十小節から成る小曲で、緩徐に、ニ長調、 $\frac{3}{4}$ 拍子との指示があり、メヌエット風のリズムで歌われる。「単純で民謡めいたこの歌曲は、メーソンの儀式における音楽に関してシャイベが述べた諸原則に合致している。」⁽¹²⁾

○フリーメーソン歌曲「結社員の旅」(Gesellenreise) K四六八

この歌曲は一七八五年三月二十六日にウィーンで作曲されたもので、モーツァルトの加盟後初のフリーメーソン作品という

ことになる。既に述べたように、この頃モーツァルトの父はウィーンに滞在中であり、しかもフリーメーソンに加盟して、四月十六日には第二級の「職人」に昇進したが、この歌曲はその昇進式に際して歌われたものとされている。テキストは、オーストリア政府の高官の一人で、「真の和合」ロッシに属し、モーツァルトの友人でもあったヨーゼフ・ラチュキキーによるもので、一七八四年秋にウィーンで書かれた。ネットウルによれば、このラチュキキーの歌詞は、「真の和合」ロッシ所属の音楽家アントン・ホルツァーによっても同じ頃作曲されているが、「ホルツァーは、彼がメーソンの生活における一つの明々白々として余り重要ではない局面として職人への進級をとらえているために、リズムやテンポの点で、より儀式に近づいているのに対し、モーツァルトの『結社員の旅』における音調は、おそらくは自分の年老いた父親の名譽を讃えることを顧慮して、柔らかで荘嚴なものとなっている。」¹³⁾ラチュキキーの詩の内容は、「職人」位階に進む者の心得を説くもので、「ゲゼツレンライゼ」とは本来、「職人の遍歴」の意である。

歌詞の第一節を示せば

Die ihr einem neuen Grade

認識の新たな位置に

der Erkenntnis nun euch naht,

今や近づきつつある汝ら、

bewandert fest auf eurem Pfade,

おのれの道を確認として歩む汝ら、

wißt, es ist der Weisheit Pfad.

知れ、これこそ叡知の道なりと、

Nur der unverdross'ne Mann

ただ孜孜としてたゆまぬ者だけが、

mag dem Quell des Lichts sich nah'n.

光明の本源に近づきえん。

曲は変ロ長調、 $\frac{3}{2}$ 拍子の独唱による有節形式。自筆譜ではオルガン伴奏で、テンポはラルゲットとなつているのに対し、自作品目録ではクラヴィーア伴奏、アンダンティーノと指定されている。二部形式の、十六小節から成る優美な旋律で、前奏と後奏が付く。

○カンカータ「汝に、宇宙の魂よ」(Dir, Seele des Weltalls) K四二九(K⁶四六八a)

この曲はモーツァルトが総譜草稿の形で未完のまま残した作品で、もし完成されれば、かなりの規模の作品となるはずであった。作曲年代は、ケツヒェルの初版以来、フリーメーション加入前の一七八三年頃とされてきたが、その第六版では、資料や様式上の観点から、加入後の一七八五年にウィーンで書かれたものとして、K⁶四六八aと訂正された。そして同年三月の前作「結社員の旅」(K四六八)作曲の直後に自発的に着手され、四月の次作「フリーメーションの喜び」(K四七一)の作曲依頼により中断、そのまま放棄されてしまったと推定される。

モーツァルトが残した形は、テノールと男声三部合唱、それに管弦楽の編成で、記譜されているのは、第一部の冒頭合唱曲の合唱パートと、低音及び第一ヴァイオリン、それに第二部のテノール独唱のアリアと低音だけで、他のパートは断片的に記されているに過ぎない。モーツァルトは更に第三部として、へ長調のテノールの二重唱の構想を持ち、現在不明の自筆譜は低音と弦による前奏が十四小節続いたあと、第一テノールの歌い出しわずか三小節の所で中断しているという。なおこの曲については、モーツァルトの未完の作品の補筆をたびたび試みた友人の聖職者マクシミリアン・シュタードラーが二種の補筆稿を残しており、これが実用されている。

歌詞は「聖ヨセフ」ロッシの盟友ロレンツ・ハシユカによるもので、その内容は宇宙の魂であり、「光」の象徴である太陽を讃美するもの。

冒頭合唱部の歌詞は

Dir, Seele des Weltalls, o Sonne,

sei heut' das erste der festlichen Lieder geweiht!

O Mächtige, ohne dich leben wir nicht;

von dir nur kommt Fruchtbarkeit, Wärme und Licht.

O Sonne, o Mächtige, Seele des Weltalls!

Dir sei heut' das erste der festlichen Lieder geweiht!

汝に、宇宙の魂よ、おお太陽よ、今日この日
最初の祝祭歌を捧げん!

おお、偉大なる者よ、汝なくしてわれら生きしことなし、

汝からのみ豊饒さ、熱情、また光はきたる。

おお太陽よ、おお偉大なる者よ、おお宇宙の魂よ!

汝に、今日この日、最初の祝祭歌を捧げん。

Dir sei's heut' geweiht,

von dir nur kommt Fruchtbarkeit, Wärme, Licht.

汝に、汝に、今日この日、そを捧げん！
汝からのみ豊饒さ、熱情、また光はきたる。

本来の編成は、独唱テノール、男声三部合唱（テノール2、バス）、フルート1、オーボエ2、ファゴット1、ホルン2、ヴァイオリン二部、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、オルガン。

第一部は（アレグロ・モデラート）、変ホ長調、 $\frac{4}{4}$ 拍子の、テノール二部とバスによる男声三部合唱で、簡明で力強い。歌詞に含まれた「光」(Licht)の語が二度目に出てくる所は、変ホ長調属七の和音の突然のフォルテで強調されている。第二部は（アンダンテ・ディ・モルト）、変ロ長調、 $\frac{3}{4}$ 拍子のテノール用アリアで、自然の恩恵を歌い、太陽に感謝する。

○カンタータ「フリーメーンンの喜ぶ」(Die Maurefreude) K 471

このカンタータは、一七八五年四月二十日に、「真の和合」ロッジの分団長で、ウィーンのフリーメーンンの中心人物だった、かのイグナツ・フォン・ボルン（彼は「魔笛」の台本の企画に手を貸し、「魔笛」に登場するエジプトの高僧ザラストロの原型とも見られている）を讃えるためにウィーンで作曲された。ボルンは鉱物学者で、当時新しい合金方法を発見したことで、皇帝ヨーゼフ二世からも賞讃の辞を賜った。それを祝うための会合が四月二十四日に行なわれ、ウィーン滞在中で、入会間もない父レオポルトも出席した。そこでこの曲は他の歌曲と共に、「授冠の希望」ロッジの盟友達によって演奏されたが、その際独唱を受け持ったのは、「後宮からの誘拐」(K 384)の初演（一七八二年）の際、ベルモンテ役を歌った名テノールで、やはり「授冠の希望」に属するヴァーレンティン・アーダムベルガーであった。このカンタータはあとで、その収益金を貧者の福祉のために寄付すべく、盟友アルタリアの所から出版された。

テキストは「授冠の希望」ロッジに属する宮廷詩人で、教区付き司祭でもあったフランツ・ペートルンによるもので、知と徳をわがものとするメーソンの喜びを歌い上げると共に、ヨーゼフ二世を讃え、また分団の名前を巧みに歌い込んでいる。

冒頭の独唱の部分の歌詞は

Sehen, wie dem starren Forscherauge

die Natur ihr Anlitz nach und nach enthüllt;

wie sie ihm mit hoher Weisheit

voll den Sinn und voll das Herz mit Tugend füllet:

Das ist Mauerergerweide,

wahre, heiße Mauerfreude.

見よ、いかに、確固とした探究者の眼には、

自然がその相貌を次第にあらわとするものかを、

いかに自然が高い叡知もて心を満たし、

また徳もて心情を満たすものかを、

これこそはメイスンの眼の楽しみにして、

真にして熱きメイスンの喜びなり。

このカンタータの自筆譜はモーツァルトの生前すでに失われてしまい、一七八五年の初版が唯一の原典資料になっている。編成はテノール独唱、男声三部合唱（テノール2、バス）、オーボエ2、クラリネット1、ホルン2、弦五部。このカンタータの主要部分は、長大で自由な形式で書かれたテノール独唱から成っており、初めからアダムベルガーを意図して書かれたためか、存分にその力量を発揮させるように、この種の作品としては極めて豊富な様式で書かれている。曲はフリーメーソンの調といわれる変ホ長調を主調としており、まず短いオーケストラの前奏のあとに、テノール独唱が歌うコンサート・アリア風のアレグロ、変ホ長調、 $\frac{1}{4}$ 拍子の第一部に始まる。この部分の後半はレチタティーヴォからアンダンテとアレストのアリオソとなり、「愛する者よ、この王冠を取れ、我等の長子、ヨーゼフの手から、これこそはメイスンの記念すべき祝典にして、これこそ、これこそはメイスンの勝利なり。」と歌われる。「ヨーゼフの手」の個所でテンポがアレストに急変し、祝祭的な気分を盛り上げている。続いて曲は第二部のテノール独唱と男声三部合唱のためのモルト・アレグロ、変ホ長調、 $\frac{1}{4}$ 拍子の部分に進むが、終結部迄はそのまま独唱で通され、最後に力強い男声合唱が加わって、興奮のうちにしめくくられる。

○「フリーメーソンのための葬送音楽」(Maurerische Trauermusik) K四七七(K四七九a)

モーツァルトのフリーメーソン作品のうちでもとりわけ有名で、重要なものである。わずか六十九小節から成る小管弦楽曲に過ぎないが、そこにはモーツァルトの死生観とも言うべきものが、極めて美しく、且つ感動的な音楽となって表現されている。アインシュタインは、「この曲は教会作品でこそないが、宗教的な作品であり、ハ短調荘嚴ミサ曲(K四二七)とレクイ

エム（K六二六）を結ぶ絆」としている。⁽¹⁴⁾ 作曲は、モーツァルトがフリーメイソンに加盟して一年近くを経た一七八五年十一月十日にウィーンで行なわれ、当時相次いで此の世を去った二人の有力な結社員を追悼する際に演奏されたと一般に考えられている。自作品目録には、「七月。盟友メックレンブルクと盟友エステルハーシの逝去に際しての、フリーメイソン葬送音楽」と記されている。メックレンブルクと盟友エステルハーシの逝去に際しての、フリーメイソン葬送音楽特別会員であり、一方のエステルハーシ・フォン・ガランタ伯フランツはハンガリートランシルヴァニア宮内大臣で、「授冠の希望」ロッシの会員であった。前者の死は十一月六日、後者は翌十一月七日で、二人の追悼式は「授冠の希望」ロッシで十一月十七日に行なわれている。その点で、しばしば指摘されるように、先の自作品目録に記載された時期とはずれがある。自筆譜の方には死者の名は特定されずに、ただ「葬送音楽」と記されているだけで、決め手がないという。この作品は一応、機会音楽的色彩が濃い事から、多くの研究者がモーツァルトの誤記としているようだが、詳細は不明である。しかし要はこの作品が単なる機会音楽以上のものを内包しているという点ではなかるうか。

楽器編成は、オーボエ2、クラリネット1、バセットホルン1、バセットホルン（追加）2、グラランファゴット（コントラファゴット）（追加）1、ヴァルトホルン2、ヴァイオリン2部、ヴィオラ、チェロ、コントラバス。この編成はやや特異だが、モーツァルトが暗く沈んだ音色を作り出そうと意図したためである。なお、コントラファゴットと二本のバセットホルンの声部は、モーツァルト自身があとから加えたものである。更にこの楽曲を特徴付けているのは、グレゴリオ聖歌風の定旋律（*cantus firmus*）の使用である。定旋律の由来は明らかでないが、トムソーによれば、プロテスタントの詩篇歌に基き、元は古代ユダヤの旋律に由来するという。⁽¹⁵⁾ そうだとすれば、あらゆる宗教の一致団結を旨とするフリーメイソンの理念にも合致するものと言えよう。

曲はアダージョ、ハ短調、 $\frac{3}{4}$ 拍子で、一定した形式はない。ハ短調は、メーソンの理念によれば、死と闇を象徴する。まず前奏として管楽器が悲嘆にくれたような、平行三度の動機を奏し出す。それに対して、第一ヴァイオリンが苦渋にみちたような音型ではいつてくる。「管楽器とヴァイオリンの対立は、人間が嘆きつつ救いもなくそれに立ち向かう非情な死のアンティテーゼに相応じるものである」⁽¹⁶⁾ やがてオーボエの平行六度の動きと、第一ヴァイオリンの三つ戸を叩くようなリズムが交替する部分へと移る。途中から並行調の変ホ長調に転調し、闇の中に一条の光がさすかと思えた所で、オーボエとクラリネットに

よるカントウス・フィルムスが無慈悲な運命を肯定しているかのように聞こえてくる。そうした運命に対して、弦が付点八分音符のリズム型で必死に抗う。それは激しい苦痛へと高まるが、それも徐々に沈静して、深い諦念のうちに、ピカルディ終止する。「終止のハ長調主和音の効果は、いわば暗黒から光明への突然の移行であり、……運命の受容による死の克服はメーソンの考え方に合致する。」¹⁷⁾ また「それはモーツァルトが一七八七年四月四日付で父親に宛てて最後の手紙を書いた時に、フリーメーソンとしての彼が抱いていた死の観念の正確な模倣である。」¹⁸⁾

○フリーメーソン分団の開会に寄せる合唱付キリート「親しき友よ、今日こそ」(Zerfließet heut, geliebte Brüder) K四八三

この歌曲は次のK四八四と共に「二つのフリーメーソン歌曲」として知られている。K四八三の自筆楽譜の表記には、「 」の開会のために」(Zur Eröffnung der)とあり、フリーメーソン結社の集会を開くために作曲されたことが分かる。自作品目録への記載がないため、作曲時期については推測するしかないが、歌詞の内容からして、一七八五年末の、例の皇帝ヨーゼフ二世によるフリーメーソン結社の改組と関係があることは確実である。既に述べたように、ヨーゼフは一七八五年十二月十一日に、ウィーンに従来存在した八つの支部を三つに統合するよう法令を出したが、これによってモーツァルトの所屬していた「善行」ロッジは他の二つの分団「授冠の希望」(Zur gekrönten Hoffnung) 及び「三つの焰」(Zu den drei Feuern)と合併して、「新冠の希望」(Zur neugekrönten Hoffnung)となり、モーツァルトもこれに加入した。そしてこの新分団の第一回集会を記念して書かれた開会用の曲が即ちこのK四八三で、恐らく一七八五年十二月にウィーンで作曲されたものと思われる。歌詞は盟友シットラーズベルクによるもので、結社を保護したヨーゼフの行ないを讃えると共に、「善行」とか「三重の焰」とか「授(新)冠の希望」とかの支部の名前が歌い込まれていて、三分団の合併が象徴的に暗示されている。

詩の冒頭の部分を挙げれば

Zerfließet heut, geliebte Brüder,

in Wonn' und Jubellieder,

denn Josephs Wohlthätigkeit

親しき友よ、今日こそ、

狂喜し、歎喜の歌を歌わん、

ヨーゼフの善行は

hat uns, in deren Brust ein dreifach Feuer brennt. 胸の中に三重の焔の燃えるわれらに
hat unsre Hoffnung neu gekrönt. われらの希望の冠を新たに飾りぬ。

編成は、独唱、男声三部合唱、それにオルガン伴奏である。曲はアンダンテ、変ロ長調、 $\frac{4}{4}$ 拍子で、二節から成る有節形式。テノール独唱で始まり、三声部の男声合唱がリフレインの効果でこれを受ける。伴奏はオルガンのみの簡素なもので、ソロとトゥッティの記入によって、レジストレーションが指示されている。

○フリーメーン分団の閉会に寄せる合唱付きリート「汝等、我等が新しき指導者よ」(Ihr unsre neuen Leiter) K四八四
前曲K四八三と明らかに対をなす作品であり、音楽的構成や記譜法などもK四八三に照応している。自筆譜に、「の閉会のために」(Zum Schluss der)とあるように、同日の新分団の集会の閉会式で歌われたものと思われる。同じくシットラースベルクによるテキストは、統合されたロッジの新しい指導者達を讃える内容のもの。
その冒頭の部分は

Ihr, unsere neuen Leiter,
und danken wir auch eurer Treue ;
führt stets am Tugendpfad uns weiter,
daß jeder sich der Kette freue,
die ihm an bess're Menschen schließt
und ihm des Lebens Kelch verstißt.

汝らわれらが新しき指導者よ、
われら今また汝らの誠に感謝せん。
たえずわれらを徳の道にあってなお遠くへと導き、
各人が彼らをよりよき人間につなぎとめ、
彼らに生命の盃を快く干させる
鎖を樂しませたまえ。

曲はアンダンテ、ト長調、 $\frac{4}{4}$ 拍子で、同じくオルガン伴奏の、二節から成る有節形式である。各節とも独唱のあと男声三部合唱が歌い継ぐが、合唱部分の歌詞は両節とも全く同じで、「聖なる誓いによって、われらまたかたく誓わん、汝らのごとく、

ひろく家を建てんことを。」と歌う。

○ドイツ語小カンタータ「無限なる宇宙の創造者を崇敬する汝等が」(Die ihr des unermesslichen Weltalls) K六一九
モーツァルトの最後の年一七九一年の七月にウィーンで作曲された。この頃のモーツァルトは四か月後の死を前にして、
「魔笛」(K六二〇)、「レクイエム」(K六二六)、「テイトの仁慈」(K六二二)といった大作の作曲に没頭していた。このカ
ンタータは、その相間をぬって作曲されたものであろう。自作品目録に「ドイツ語小カンタータ」(Kleine deutsche Kantate)
と書かれたこの作品は、ハンブルクの商人で、レーゲンスブルクのフリーメーソン支部「三つの鍵」(Zu den drei Schlüsseln)
に属する熱心なメーソンであり、また「魔笛」の台本作者シカネーダーとも親しかったフランツ・ツィーゲンハーゲンの依頼
によるもので、歌詞もツィーゲンハーゲン自身によるものであった。彼はルソーや百科全書派から影響を受けて、教育と宗教
の改革を唱えた急進的な啓蒙主義者で、シュトラスブルクで自然主義運動を推進し、自ら「自然の友集団」と名乗る集会を主
催していた。この集会で歌われるべく意図されたのがこのカンタータである。従ってこの曲は狭義のフリーメーソン音楽では
ないが、詩の内容が結社の理想をはっきりと歌い上げており、そこにフリーメーソン思想との共通性を認めて、モーツァルト
も作曲を引き受けたのだらう。

歌詞の前半を引用すれば

[Rezitativ]

Die ihr des unermesslichen Weltalls Schöpfer ehrt,

Jehova nennt ihn, oder Gott,

nennst Du ihn, oder Brahma, hört!

Hört Worte aus der Posaune des Allherrschers!

Laut tönt durch Erden, Monden, Sonnen,

ihr ew'ger Schall,

[レチタティーヴォ]

無限なる宇宙の創造者を崇敬する汝らが、

彼をエホバ、あるいは神と名づけようよ、

フー、またはブラーマと名づけようよ、聴きたまえ、

万物の支配者のラッパが語る言葉を聴きたまえ!

その永遠の響きは、大地を、月を、太陽を、

貫いてたからかに鳴りひびく。

hört Menschen, ihn auch ihr!

[Andante]

Liebt mich in meinen Werken!

Liebt Ordnung, Ehemalß und Einklang!

Liebt euch, euch selbst und eure Brüder!

Körperkraft und Schönheit sei eure Zierd',

Verstandeshelle euer Adel!

Reicht euch der ew'gen.

Freundschaft Bruderhand,

die nur ein Wahn, nie Wahrheit,

euch solang entzog!

聴きたまえ、人びとよ、その言葉を汝らもまた!

[Andante]

わがなせる業のうちにわれを愛せ!

秩序を、調和を、そして諧音を愛せ!

汝らを、汝自身と汝らの兄弟たちを愛せ!

体力と美は汝らの誇りとなり、

知性の輝きは汝らの気品となれ!

永遠の友情にみちた兄弟の

手をさしのべよ。

その手を汝らからかくも久しく遠ざけていたものは

真理ではなく、ただ狂気であつた!

曲はピアノ伴奏付きの(テノール)独唱のために書かれており、明確な区分はないが、ほぼ五つの部分に分けられる。まずアンダンテ・マエストーソ、ハ長調で、ピアノによる前奏に始まり、付点リズムの和音が力強く連打される。これは「無限なる宇宙の創造者」の広大な力を暗示するものである。続いてテノール独唱によるレタタティーヴォにはいるが、それは前掲の歌詞による造物主の讚美であり、宗派を超越した全宗教への呼びかけである。次いでアンダンテ、ハ長調、 $\frac{3}{4}$ 拍子のアリアの部分に移るが、ここでは「秩序・均衡・調和」や「美・力・知」といったメーソンの三つの鍵言葉が述べられ、友愛が歌われる。アレグロ、イ短調、 $\frac{1}{4}$ 拍子の部分がそれに続くが、偏見を捨て、迷妄を排するといった啓蒙主義的理念が強い口調で訴えられる。第四の部分はアンダンテ、ニ短調、 $\frac{6}{8}$ 拍子へ長調、 $\frac{1}{4}$ 拍子で、「啓蒙」の教えが押し進められ、知や力や友愛が促される。最後のアレグロ、ハ長調、 $\frac{1}{4}$ 拍子では、「その時、生の真の幸福が成就される」と、地上の樂園達成の喜びが最高潮に達して曲を終る。

以上のように、やや大規模な、変化に富んだ展開のうちに、フリーメーソンと共通する啓蒙主義の理念が高らかに歌い上げ

られるのである。なお、トムソンは、この頃同時に作曲が行なわれていた「魔笛」の響きに通じるものを、この曲の随所で指摘している。⁽¹⁹⁾

○フリーメーソン小カンタータ「我等が喜びを高らかに告げよ」(Laut verkünde uns're Freude) K六二二三

この作品は一七九一年十一月十五日にウィーンで作曲された。モーツァルトの自作品目録の最後に記入されたもので、彼自身によって完成された最後の作品でもある点、興味深い。この頃は「魔笛」(K六二〇)や「ティト」(K六二二)の上演も済み、クラリネット協奏曲(K六二二)も一か月前に書き上げ、残る作品は、まだ作曲途中の「レクイエム」(K六二二)だけであった。死の二十日程前に書かれたわけだが、自筆譜の筆蹟はしっかりしており、修正の跡もほとんど見られないという。所でこのカンタータは、一七九一年十一月に新たに完成された、ウィーンの「新冠の希望」ロッジの会堂のこけら落としに演奏されたもので、十一月十八日にモーツァルト自身が指揮して初演を行なったが、その二日後には病床に臥し、二週間後は世を去ることになるのである。

テキストは例の「魔笛」の台本作者シカネーダーの作とされる。シカネーダーはフリーメーソンではあったが、このロッジのメンバーではなかった。どのようにして彼がこのロッジの歌を書くことになったかについて、ネットウルは、恐らく彼がちょうどこの時期に「魔笛」によって結ばれていたモーツァルトから頼まれたのだらう、と推測している。⁽²⁰⁾なおトムソンは、シカネーダーが不品行のためにレーゲンスブルクのメーソン支部から追放されて、その後ウィーンでは一度もどの支部にも加入が許されていなかったことから、「魔笛」の真の台本作者と目されることもある、例のギーゼッケをその作者と見ている。⁽²¹⁾ギーゼッケは本名をヨハン・ゲオルク・メッツラーといい、俳優、劇作家で、鉱物学者でもあり、「新冠の希望」ロッジのメンバーであった。

さて、編成は大きなもので、独唱三部(テノール2、バス)、男声三部合唱(テノール2、バス)、フルート1、オーボエ2、ホルン2、ヴァイオリン二部、ヴィオラ、チェロ、コントラバスより成る。重要なテノールのパートは恐らく同じ分団の盟友アーダムベルガーが受け持ったものと思われる。

歌詞は、生きる喜び、労働の団結、人間的な愛、そして人類の未来への希望といったものを表現している。

始まりの部分は

[Tutti]

Laut verkünde unsre Freude
froher Instrumentenschall,
jedes Bruders Herz empfinde
dieser Mauern Widerhall.

[Solo]

Denn wir weihen diese Stätte
durch die goldne Bräuterkette
und den echten Herzverein
heut' zu unserm Tempel ein.

[合唱]

われらが喜びを高らかに告げよ、
楽しい楽器のひびきよ、
盟友の心のひとつひとつを受けよ、
この壁のこだまよ。

[独唱]

われら、この場所を、
盟友の金鎖と
純真な心の結びつきを通して、
今日、われらが神殿として献堂するゆえに。

まずアレグロ、ハ長調、 $\frac{4}{4}$ 拍子の、祝祭の喜びに満ちた、力強い器楽の前奏が続いて、冒頭の合唱が始まるが、その旋律は直截簡明なものである。それはカノン風に現われる独唱三部を挟んだA—B—Aの三部形式をとる。それに続いて、恐らくアーダムベルガーが歌ったであろうレチタティーヴォが、献堂を告げる。終りの方にモーツァルトの前支部の名を示す「善行」の言葉が見られる。このレチタティーヴォには、アンダンテ、ト長調、 $\frac{2}{2}$ 拍子の、テノールのアリアが続く。「かかる神の全能は、静けさのうちにあつて人類に祝福を施す」という言葉と共に高雅な旋律が流れ、感動的な盛り上がりを示す。続く部分はテノールとバスによる二重唱レチタティーヴォである。ここではメーソンの理念の反対概念である嫉妬、貧欲、誹謗といった言葉が俎上に乗せられる。続いてテノールとバスによる、アンダンテ、ヘ長調、 $\frac{3}{4}$ 拍子の二重唱で、まずテノールとバスが交互に二度ずつ歌った後に、デュエットで歌われる。ここには壁、仕事、協和、愛、光、徳、希望といったメーソンの言葉が散りばめられている。最後には冒頭の合唱がもう一度高らかに繰返されて全曲が終る。

そこには円熟した歌謠性と共に、「魔笛」を思わせるような清澄な世界が広がっており、とても死をわずかあとに控えた者の作とは思われず、モーツァルトのフリーメーソン作品のうちでもすぐれたものと言うべきであろう。

フリーメーソン歌曲「われら手に手をとって」(Laßt uns mit geschlung'nen Händen) K六二三^a 付録 (K六二三a)

この作品は、前のカンタータ (K六二三) がウィーンで一七九二年に、「真の和合」ロジジのかつてのメンバーであったヨゼフ・フラチャンスキーの元で出版された時、その付録として「 の閉会のために」(Zum Schluss der) と書き込まれて、収載されていたものである。このことから、この曲はカンタータ (K六二三) が歌われたのと同じ新会堂の閉会に当たって歌われたもので、K六二三と同時期に作曲され、テキストもシカネーダーによるものと考えられてきた。しかしこの作品はモーツァルトの自筆譜には見られず、初版のみが唯一の出典となっているため、その真偽に対して疑問を残している。モーツァルトの旧会集では、作曲時期不明 (一七九一年以前?) としてこれを付録に載せ、一方、新全集では、楽節技法やバス進行などの点から、「疑義ある作品」に分類している。またネットウルなどはミヒャエル・ハイドンの作品と想定している。⁽²²⁾

所でこの作品は、 $\frac{3}{4}$ 拍子、オルガン伴奏付きの男声三部合唱 (テノール2、バス) で、合唱は三度の並行進行を中心とした単純なもの。歌詞は三節迄あって、有節形式で繰返し歌われる。

その第二節迄を挙げると

Laßt uns mit geschlung'nen Händen, Brüder, diese Arbeit enden unter frohem Jubelschall. Es umschlinge diese Kette, so wie diese heilige Stätte, auch den ganzen Erdenball.	われら手に手をとって、 盟友よ、この仕事を終えん、 楽しい歓呼のひびきのうちに、 この絆が、 この聖なる場所をかたく取りまきしごとへ、 また全地球をも取りまかんことを。
---	---

Laßt uns unter frohem Singen
vollen Dank dem Schöpfer bringen,
dessen Allmacht uns erfreut.
Scht, die Weihe ist vollendet;
wär doch auch das Werk geendet,
welches uns're Herzen weilt!

われら楽しき歌を歌いつつ、
創造主にまっただき感謝をもたらさん、
主の全能はわれらを喜びで満す。
見よ、奉獻の儀式は終わりぬ。
またわれらが心に聖感を与えし、
仕事もまた終わりしなれば!

なおこの旋律は、歌詞を変えて、一九四六年以降、オーストリア国歌に制定されたため、よく知られている。しかしこの曲がモーツァルト自身によるものか否かは別として、典型的なフリーメーソン歌曲であることに変わりはない。

以上見てきたように、これらの音楽は、ロッジの開会や閉会、新殿の開堂式、更には結社員の昇級を祝う歌曲や、盟友の死を悼む葬送の音楽といった風に、結社の会合や種々の儀式で歌われ、奏されるための、いわゆる機会音楽が殆んどであり、作風も平明で、演奏も、アーダムベルガーのようなすぐれた歌手が独唱部を受け持つ場合を除いて、容易なものが多く、テキストの内容も互いに似かよっているものが多く、フリーメーソンを象徴するような言葉や、その反対概念を表わす言葉が頻繁に顔を出す。また音楽的象徴についても、ここでは詳細に触れられなかったが、トムソンの言うように、モーツァルトのフリーメーソン作品にも同様に現われているのであり、こうしたシンボルのいくつかをこれらの作品において指摘することはさほど困難ではないだろう。

このようにモーツァルトのフリーメーソン作品は、彼以前のフリーメーソン作品と多くの共通点を持っているが、しかしそれらとは決定的に違った点を持っていることも確かである。ネットウルも言うように、それらが多くは、常套的な型にはまった、レヴェルの低い、専ら機会音楽的性格を持つにすぎないのに対して、モーツァルトの場合は、同じ機会音楽的作品であるにも拘らず、フリーメーソン結社の深遠な思想や象徴へと、その鋭い直観的な体験を通して、他の誰よりも肉迫し得ているのである。²³⁾このことは、モーツァルトのフリーメーソン作品のうちでも特にすぐれた「フリーメーソン葬送音楽」などを耳にす

れば、おのずと明らかであらう。

さてモーツァルトは、やはり死の年の一七九一年に、あの偉大な歌劇「魔笛」(K六二〇)を書き上げたが、このジングル
ユビールの内容が、単なるお伽噺ではなくて、本質的にフリーメイソンのものであることは、ネットゥルやジャック・シャイエ等
の研究者によって、徹底的に解明され、一般に認められる所となっている。本稿では殆んど触れられなかったが、この「魔
笛」こそ、幼時から一貫してフリーメイソンの状況の中にあつたモーツァルトが、この結社との関わり合いにおいて産み出し
た最高の作品だったのである。

註

- (1) Mozart, Briefe und Aufzeichnungen (Gesamtausgabe, herausgegeben von der Internationalen Stiftung Mozarteum Salzburg, 1962—1975), III, S.373.
- (2) Katharine Thomson: The Masonic Thread in Mozart (Lawrence and Wishart, London, 1977) [湯川新・田口孝吉共訳「モーツァルトとフリーメイソン」(法政大学出版局) 四八頁]
- (3) Paul Nettl: Musik und Freimaurerei. Mozart und die königliche Kunst (Eislingen a. N., 1956) (英語版 Mozart and Masonry, 1957) [海老沢敏・栗原雪代共訳「モーツァルトとフリーメイソン結社」(モーツァルト叢書17、音楽交友社) 五八頁]
- (4) トムソン、前掲書、四八頁
- (5) 同、前掲書、四九—五一頁
- (6) ネットゥル、前掲書、九六頁
- (7) Mozart: Complete Masonic Music. Peter Maag, Choir & Orchestra of the Vienna Volksoper & other artists. (Turnabout(VOX)TV3413—4) (日本録音 VOX—H4409—10)
- (8) Alfred Einstein: Mozart. Sein Charakter, sein Werk (Stockholm, 1947) (英語版 Mozart. His character, his work, 1945) [浅井真典訳「モーツァルト、その人間と作品」(白水社) 三三三頁]
- (9) トムソン、前掲書、一一七—一八頁
- (10) Mozart, Briefe und Aufzeichnungen, IV, s.41 [柴田治三郎編訳「モーツァルトの手紙」(一)(岩波文庫) 一一四頁]
- (11) 訳詩は中央公論社刊「モーツァルト大全集解説Ⅷ」所収、海老沢敏訳による。(以下同様)
- (12) トムソン、前掲書、五一頁
- (13) ネットゥル、前掲書、九〇—一頁
- (14) アインシュタイン、前掲書、四七六頁

- (15) トムソン、前掲書、一一二頁
- (16) ネットゥル、前掲書、一一四頁
- (17) トムソン、前掲書、一一二頁
- (18) ネットゥル、前掲書、一一五頁
- (19) トムソン、前掲書、二二七頁以下
- (20) ネットゥル、前掲書、一〇四—五頁
- (21) トムソン、前掲書、二五六頁
- (22) ネットゥル、前掲書、一〇五頁
- (23) 同、前掲書、一一六頁
- (24) Jacques Chailley: *La Flûte enchantée—Opéra maçonnique Essai d'explication du livret et de la musique* (Paris, 1968) [高橋英郎・藤井康生共訳「魔笛—秘教オペラ」(白水社)°。その他 Jean et Brigitte Massin & Roger Cotte 等。
- その他の参考文献
- 海老沢敏「モーツァルト研究ノート」(モーツァルト叢書1、音楽之友社、昭和四十八年)
- M・G・ウヰの“Freimaurermusik”の項
- New Grove Dictionary of Music and Musicians の“Masonic music”の項
- 平凡社刊大百科事典より、フリーメイソンリーの項
- 音楽之友社版「最新名曲解説全集」第4巻及び補巻。
- 石井宏「十八世紀のモーツァルト」(帰徳書房、昭和五十二年)
- 高橋英郎「人間の歌モーツァルト」(白水社、昭和五十二年)
- Manly P. Hall: *The Lost Keys of Freemasonry*, 1923. [吉村正和訳「フリーメイソンの失われた鍵」(人文書院、昭和五十八年)]
- 赤間剛「フリーメイソンの秘密」(三一書房、昭和五十八年)
- モーツァルト研究所編「モーツァルト全作品目録—年代順主題解説」第Ⅷ巻、第Ⅸ巻
- Köchel: *Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke W. A. Mozarts* (7. Auflage, 1965)